

中英語期・初期近代英語期における補文標識 *that* の文法化に関する一考察

That 痕跡効果の欠如・出現の観点から

岩崎宏之

1. はじめに

中英語期・初期近代英語期においては、現代英語で広く見られる *that* 痕跡効果が観察されず、補文標識 *that* に痕跡が後続する連鎖が存在する。縄田 (2013: 122) は、自身のコーパス調査の結果を(1)のように示し、*that* 痕跡効果が出現したのは E3 期 (1640-1710) であると論じている。

(1)

	M1	M2	M3	M4	E1	E2	E3	L1	L2	L3
that-t	6	1	3	1	1	2	0	0	0	0

本論では、英語史における *that* 痕跡効果の出現は、機能範疇 Fin の素性が[+nominal]から[-nominal]に変化したこと、すなわち、Fin の文法化に起因すると主張する。また、本主張が含意することとして、*that* 痕跡効果の出現を E3 期とする縄田の主張に対し、その出現時期を後期中英語期とする説を支持することにも触れる。

2. 中英語期・初期近代英語期における補文標識 *that* の特徴

まず、中英語期・初期近代英語期における補文標識 *that* が持つ特徴を、2つの事実から示したい。1つ目の事実として、当時の英語では二重詰め COMP (Doubly-filled COMP) が可能だったことが挙げられる。この現象では、CP 領域にある疑問詞が *that* に先行するため、当時の *that* が分離 CP 構造上で低い位置に生起していたことを示唆する。さらに、当時の補文標識 *that* の機能に目を転じると、多種多様な語に付加し文を導いたことで接続詞の確立に寄与したという事実がある。接続詞が定形節を導く品詞であることを鑑みると、当時の *that* が分離 CP 構造内の Fin の位置を占めていたと考えるのが妥当である。また、「独立した2文を従属構造で関係付ける」という *that* の機能は古英語期から引き継いだものであり、中英語期・初期近代英語期でも、語源である指示代名詞の性質が共有されているといえる (cf. Roussou (2020))。以上の点をまとめ上げると、中英語期・初期近代英語期における補文標識 *that* に対し、「Fin ([+nominal])」という特徴付けを与えることができる。

3. 理論的枠組み：Rizzi and Shlonsky (2007)

続いて、*that* 痕跡効果の分析として本論が依拠する Rizzi and Shlonsky (2007) を概観する。

(2) $[_{ForceP} \text{ that } [_{FinP} \text{ Fin } [_{SubjP} \text{ wh}_i \text{ Subj}^0 \text{ } [_{IP} t_i \dots]]]]$

(2)において、補文標識の *that* は Fin の位置に基底生成し、Force の位置に主要部移動する。一方、疑問詞は IP 指定部から SubjP 指定部へ移動し、主語基準 (Subject Criterion) を満たす。そして、この SubjP 指定部の位置において基準凍結 (Criterion Freezing) を受け、主節への移動が禁じられるため、*that* 痕跡効果が生じる。これに対し、*that* が省略されている場合は文として容認されることがよく知られているが、Rizzi and Shlonsky は、そのような文の埋め込み *that* 節に対し、次の(3)の構造を仮定する。

(3) $[_{FinP} \text{ wh}_i \text{ Fin } [_{SubjP} \text{ Subj}^0 \text{ } [_{IP} t_i \dots]]]]$

(2)との決定的な違いは Force の投射が存在せず Fin が主要部移動しないことであるが、(3)において、Fin は名詞的な要素で φ 素性を持っている。その Fin が Subj⁰ の要求する主語基準を満たすことができるため、IP 指定部の疑問詞は SubjP 指定部への移動が不必要となり、基準凍結を免れることができる。従って、疑問詞は FinP 指定部を経て主節へ移動することができ、*that* が省略された文は問題なく生成される。

4. 提案

中英語期・初期近代英語期の補文標識 *that* が「Fin ([+nominal])」という特徴を備えていたという2節での議論を踏まえ、本節では、当時の埋め込み *that* 節が以下の(4)の構造を持っていたとする案を提出する。

(4) $[_{FinP} \text{ that } ([+nominal]) \text{ } [_{SubjP} \text{ Subj}^0 \text{ } [_{IP} t \dots]]]]$

この案の下では、当時の埋め込み *that* 節には Force が存在していなかったことになる。Force は文が平叙文なのか疑問文なのかといった文タイプを統語的に決定する機能範疇であり、それが備わっていない当時の埋め込み *that* 節は、その文タイプが何か別の方法によって決定されることになる。本論は Rizzi and Shlonsky (2007: 150) に倣い、埋め込み *that* 節が平叙文であることは、ECM 構文と同様に、主節動詞による選択関係により意味的に認可されていたという見解を採用する。さらに、(4)の構造を仮定した場合、「Force によって文タイプが

統語的に定めなければならないような埋め込み *that* 節は当時存在していなかった」ことが予測される。主節動詞との選択関係による認可が想起しにくい埋め込み *that* 節の例として文主語の事例 (例. *That the world is round is obvious.*) が挙げられるが、以下に示す筆者のコーパス調査の結果は、この予測を裏付けている。

(5)

	中英語 [PPCME2, ver. 2.4]	初期近代英語 [PPCEME, ver. 1.3]	後期近代英語 [PPCMBE2, ver. 2.1]
生起数	5	22	119
1 万語あたりの生起率	0.04	0.13	0.43

中英語期については、3例が同一テキストからのものであり、文法システム上は文主語が不可能だったと言え、埋め込み *that* 節に Force がなかったことの証拠となる。その後、初期近代英語期から後期近代英語期に移る際に文主語の生起率が有意に高まることから、埋め込み *that* 節に Force が生じたのはその頃だと判定される。

(4)の構造において、Fin の位置を占める *that* は[+nominal]の素性を持つため、Subj⁰の要求する主語基準を満たすことができ、現代英語で *that* が省略された文と同じ理由で容認される。中英語期・初期近代英語期の *that* が[+nominal]の素性を持つことを示す別の根拠として、当時の英語で *expletive pro-drop* が観察されていたことが挙げられる。Van Kemenade (1993: 244) によると、*expletive pro-drop* を許す言語は[+pronominal]の素性指定を含む機能範疇 C を有するものに限られる。*expletive pro-drop* が許されない現代英語では、C、より具体的に Fin は[-nominal]の素性を持つことになるが、van Kemenade (1993: 245) は、英語の機能範疇 C/Fin が[+pronominal]の素性指定を失った背景に V2 現象の消失があると述べている。従って、V2 現象が消失して以降は、Fin が[-nominal]の素性を持つようになったため、(4)の構造において Fin が主語基準を満たせなくなる。この結果生じることになる疑問詞の SubjP 指定部位置での基準凍結が、英語史上で *that* 痕跡効果が出現した原因となる。

5. 埋め込み節における Force の創発

補文標識 *that*/Fin が[-nominal]の素性を持つことで機能範疇としての性質をより帯びることになるため、EPP 特性により何らかの要素が指定部位置を占めるようになったはずと予測する。この予測の検証に際して、van Gelderen (2004: 84) が埋め込み節における Force の創発を促した要因の 1 つとして埋め込み節内での話題化 (Relande in by a rop, a rode *bat* hym pozt (van Gelderen (2004: 54)), 強調は筆者) を指摘していることが興味深い。後期中英語期に成立した当時の話題化では (cf. van Kemenade (1997)), 現代英語とは異なり、話題要素が *that* に先行する。当時の話題化は、*that*/Fin の EPP 特性を話題要素が満たしている現象として捉えることができる。そして、話題要素は一般に主節要素であることから、埋め込み *that* 節内の話題化が成立した後期中英語期以降埋め込み節が主節として再分析され、主節と同様 Force が創発するに至ったと考えられる。本論の主張は、埋め込み節の Force の創発を導いた現象として van Gelderen が同定した話題化について、それが後期中英語期に可能となったことに対する理論的根拠を提供したことになる。

6. おわりに

本論では、英語史上における *that* 痕跡効果の出現は、補文標識 *that* が占める Fin の素性が[-nominal]に変化したことによるものであると論じた。4 節で述べたように、この文法化が V2 現象の消失によって引き起こされたのであれば、V2 現象は後期中英語期に消失したことから、*that* 痕跡効果も後期中英語期に出現したことになる。縄田 (2013: 124) は、「近代英語期における *that-t* は V-to-T 移動が可能なテキストにおいてのみ許される」という一般化を提示しており、近代英語期における *that* と痕跡の連鎖が文法システム上の要因によって認可されていることも見込まれる。英語史上の *that* 痕跡効果の出現時期については、今後の研究課題としたい。

謝辞

本研究は、JSPS 科学研究費補助金若手研究 (課題番号 18K12410) の助成を受けている。

主要参考文献: Gelderen, Elly van. (2004) *Grammaticalization as Economy*, John Benjamins, Amsterdam. / Kemenade, Ans van (1993) "Syntactic Changes in Late Middle English," *Historical Linguistics 1989: Papers from the 9th International Conference on Historical Linguistics*, ed. by Henk Aertsen and Robert J. Jeffers, 235-248, John Benjamins, Amsterdam. / 縄田裕幸 (2013) 「CP カートグラフィによる *that* 痕跡効果の通時的考察」, 中野弘三・田中智之 (編) 『言語変化—動機とメカニズム—』, 開拓社, 東京, 120-135. / Rizzi, Luigi and Ur Shlonsky (2007) "Strategies of Subject Extraction," *Interfaces + Recursion=Language?: Chomsky's Minimalism and the View from Syntax-Semantics*, ed. by Uli Sauerland and Hans-Martin Gärtner, 115-160, Mouton de Gruyter, Berlin. /